

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 28 日現在

機関番号：27104

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24792516

研究課題名(和文) 看護職の専門性を効果的に発揮する子育て支援者コンピテンシーに関する研究

研究課題名(英文) Research on the competency of the child-rearing supporter to demonstrate effectively their abilities as a nurse

研究代表者

吉川 未桜 (Yoshikawa, Mio)

福岡県立大学・看護学部・助教

研究者番号：40341523

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：研究目的は、看護職による子育て支援の課題を明確化し、看護職の専門性を効果的に発揮するための子育て支援者コンピテンシーを作成することである。まず、母親20名へインタビューを行った。母親は看護職に丸ごと受け止めてもらえることで自信をつけることができていた。反対に、一方的な指導や物足りない指導では母親は不安や不信を募らせ、看護職を頼らない選択をしていた。次に熟練した子育て支援者4名へインタビューを行い、母親を丸ごと受け止めながらも専門的知識を使って母親を導く子育て支援者コンピテンシーの要素案を抽出した。今後検討を継続し完成・活用していく予定である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to develop the competency of the child rearing supporters to demonstrate effectively their abilities as a nurse, after clarifying the problems of the child-rearing supports by nurses. First, the problems were clarifying among interviewing 20 mothers. AS a result, some mothers thought that some supports by nurses gave the mothers confidences in their child-rearing. On the other hands, some mothers lost confidences in their child-rearing because of unilateral and unsatisfied advices from nurses, and then the mothers decided not asking these nurses to help. Next, elements of the competency of the child rearing supporter to protect mothers by using technical knowledge were extracted though the interview from 4 skillful child-rearing supporters. These elements of the competency will be continuously considered for demonstration effectively.

研究分野：小児看護学

キーワード：小児看護 家族看護 子育て支援 コンピテンシー

1. 研究開始当初の背景

子育ての孤立化・不適切な養育など、子育て過程で起こる様々な問題が指摘され、地域では種々の子育て支援が盛んに実施されている。特に、子育て支援では支援者の質が重要とされている。相談は母親にとって勇気を必要とするだけに期待も大きく、かつ自己のプライベートな話や脆弱さをさらす場でもあるため、母親は支援者の言動に非常に敏感であると考えられる。しかし、筆者の調査では、看護職による子育て支援の弊害が指摘され(吉川、2011a)、看護職の言動に不安・不満・不信を抱いた母親も42%おり(吉川、2011b)、今改めて看護職による子育て支援の質の向上が求められていると考える。

一方、看護職は、医療保健や子どもに関わる専門職であるという立場上、母親に言いにくいことも伝えなければならない場合がある。指導内容が専門職の間で異なり、母親が混乱することもある。つまり、看護職が行う子育て支援場面は、相談内容の繊細さや、専門性による言葉の重さ、子どもの命や健康に直結する医療保健の内容を豊富に含む場合があることなどから、母親に与える影響が大きく、より慎重に言動に配慮した子育て支援者コンピテンシーが必要となると考えられる。

専門職には行った支援の評価を行う責任がある。そこで、本研究で看護職が行った支援によって、なぜ母親が傷つき混乱することがあったのか、要因や過程・母親の心理的影響について検討する。これにより子育て中の母親が医療保健に不安や不信を抱くことなく安心して健やかに子育て親育ちできる環境につながると考える。

2. 研究の目的

子育て中の母親の状況や看護職による子育て支援の課題を明確化し、看護職の専門性を効果的に発揮するための子育て支援者コンピテンシーを作成する。なお、今回の子育て支援は一般的な母親へのポピュレーションアプローチを対象とする。

3. 研究の方法

研究 : 母親の個別面接調査およびフォーカスグループインタビュー(以下、FGI)を実施。看護職の関わりによる効果的(プラスの影響)・非効果的(マイナス)の影響を明らかにする。どのような支援が効果を発揮し、どのような言葉や態度が母親を追い詰め傷つけたのか、行った支援や指導に対する母親の受けとめ方やその後の影響と、母親の状況など背景要因を探索した。また、産婦人科・小児科・救急など母子が受診する病院・健診などの場所別の支援に対する母親の印象・思いを調査した。母親の個別インタビューは平成24~25年度に、FGIは平成26年度に実施した。

研究 : 熟練した子育て支援を行って

ると母親や地域の子育て支援者に紹介された看護職に対し平成27年度に半構造化面接を行い、子育て支援者としての効果的な関わり方を質的記述的に検討した。

調査は、いずれも福岡県立大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

本報告では、研究協力者の言葉を“ ”、看護職の言葉を「 」、カテゴリーを【 】で示す。また、実際の発言では“保健師”や“助産師”など固有名詞で表現された部分もあるが、本報告ではすべて“看護職”として表現する。

研究 : 子育て中の母親への調査

個別インタビューは7名(平均年齢32歳)、FGIは13名(平均年齢35歳)の母親に協力を得た。19名の母親は看護職の関わりによるプラスの影響とマイナスの影響の両方を経験し、1名はプラスの影響のみの母親であった。エピソードは、第1子の時が多く、時期は最近から11年前までであった。

(1) 子育て中の母親の心身の状態

母親の身体・心理面の状況を、個別面接に協力した母親のインタビュー内容と、FGIの母親13名のアンケート(回収数25; マイナスの影響を受けた時12、プラスの影響を受けた時13)から検討した。

子育て中の母親は“体調が悪い時は精神的にゆらく”“産後は敏感になる。ぐさつきたり、カッとしたり”と述べるなど、【精神的にゆらぎ敏感】になっていた。そのような時の効果的な看護職の対応はプラスの影響を及ぼしていた。母親は“イライラしてギャンギャン言って。子どもと遊ぶのがちっとも楽しくない。あの言葉がなかったら、表向きのいい親で家では長男を虐待していたかも。一歩間違えてたらしてただろうな。紙一重。たたきすぎて死なせたとか”と述べ、“そういうときに直接的な指導や助言をくれるわけではないけれど、今までの日常のささいなことで、頑張っているね。そう言われるだけで全然違う”と述べている。また、子育ての悩みは母親にとって【簡単には言えない】ものである。母親は“子育てで直面する悩みって言葉にすればなんでそんなことって言うのもためらわれるようなことが多いからかえって言いにくい”“上の子にイライラするとか家族にも言えない”“意外と深刻なことで親しい人には話せないから”“そこそ自分ですべてやってきた人ほどうまくSOS出しにくい”と述べていた。

そんな中で、看護職に対して母親は“サポートが回りにいなかったからありがたかった”と述べている。だが、それは別の言い方をすると“看護職だから言っていること正しいとしか思わない”“もう病院を信じるしかないって思って”“本当信じるしか、この

人たちしか頼りがいなかったから”など【頼らざるを得ない存在】でもある。また、看護職は“指導とか評価をされたくない人にとっては【SOSを出しにくい相手】”でもある。“専門家の言葉とカリアクションは影響力が大きい”など母親にとって看護職は【専門家であり影響力のある人】であり、時に“ポリシーがあるから毅然とした態度なのかな。せめて中間位でいてくれたら”“良くも悪くも宗教のように先生の指示を待つ雰囲気もある”といった影響を与える存在にもなる。看護職は自分たちが子育て中の母親にとって予想以上に大きな影響をもつ存在になりうることを認識する必要がある。

(2) 母親への看護職の効果的支援と影響

母親は、看護職が【丸ごと受け止めてくれた】【プラスの言葉かけをしてくれた】、【根拠を説明してくれた】、【ほったらかしにしないでくれた】こと等に感謝し、安心や信頼を寄せていた。中でも【丸ごと受け止めてくれた】ことは、母親への効果的な関わりであった。“関係ない話とかでなくちゃんと聞いてくれた”“すごい共感してきてくれた”“悩んでいることも含めて肯定してくれた”“事情を全部分かってくれた。”“すごく頑張っているねって認めてくれた”“自分頑張っているんだと思ってつまりが取れた”“そうよねってずっと話を聞いてくれる。そういうことがやっぱりお母さんとしてはありがたかった”など多くの母親の言葉が聞かれた。また、看護職の【話しやすい雰囲気】も重要で、“雰囲気も話やすかった”“さらっとした感じで来たね～って声かけてくれて”“ものすごく普通に話を聞いてくれた。同じお母さんの立場という感じで”“その人は上から下ではなかった”と述べていた。反対に、“聞きますよみたいな感じで傾聴してますみたいなのだとすごくしゃべりにくい”“教えてあげますという雰囲気だとあの人に相談しようという気になれなかった”“評価されるのが怖かったら相談自体もしない”と述べ、看護職の上から目線の態度を感じると、母親は話す気がなくなっていた。母親が話せる・言えることは母親の心が癒え、心の安定をはかることにつながる。母親は、“話してすっきりした”“話すとし少し楽になる”“質問してくるという感じではないんだけど、漠然とした不安・焦燥感が話すことで、自分で具体化できる。自分で気づいていける。何も言ってはくれないけど、自分で考えるきっかけをくれた。”“答えが欲しいのではなく、ぐるぐる同じこと煮詰まってしまう。ただしゃべることガス抜きをしている。自分の中のバランスをとるのに役に立つよね。だからそれを否定されるとすごくダメージが大きい。”などと述べていた。

また、看護職の立ち位置は、【上でも下でもなく対等】であることが重要である。母親は“同じ立場で対等に話ができるのが一番い

い”“相手の専門性とかあまり関係ないのかも。何かアドバイスしないと、こう教えてあげなきゃとかじゃなくて。あんまり専門性を出されない方が母親にはいい”と述べている。“知識は読んで頭にあっただけど、生きた言葉で体験をのせて伝えてくれて。看護職でも悩んだりするんだという安心感もあった”と看護職が母親と同じ立場で共感し【プラスの言葉かけをしてくれた】ことも母親の安心につながっていた。“怒られると思って言ったら、受け止めてもらえて泣いた。ほっとした。心が楽になった。具体的なやり方を教えてもらえた”と、言えた事を受け止めてもらえ悩みが解決できた事例もあった。看護職が対等で話しやすく受け止めてくれる存在であることによって、母親が【簡単には言えない】悩みを言葉に出せ、それを全部受け止めてもらえることで、心のつまりがとれ、心が安定し、“自分で気づき”“自分で決められて”“自分で決めたことだからと思える”と母親としての自覚・自立に向かうことができるのだと考えられる。ある母親は、看護職の関わりを振り返って“私が幸せな気持ちになれるようにしてくれたんだと思う”と感謝を述べており、結果的に“お母さんが救われれば子どもも救われるから”と述べていた。看護職は、子どもの健やかな発育を思い母親に指導する構図に陥りがちだが、まずは母親が笑顔になれるサポートをすることが最も大切である。そして、看護職からプラスの気持ちになるサポートを受けた母親は、“悩んだからこそどうしてほしいか分かる。自分も支えられたから今度は支える”と述べ、前向きな気持ちになっていた。

(3) 母親への看護職の非効果的支援と影響

母親を傷つけたり困惑させたりした看護職の言葉として「ふつうは～」「～のはず」「おかしいね」「あり得ない」「それはダメ」「何で～するの?」「母乳が足りてない」「この子母乳飲むのへたくそね」「結婚遅かったのね」「あんたみたいな人は～」「そんなことも知らないの」「ばかじゃないの」「この後に及んでまた子ども産んだの」などの否定的な言い方や、決めつけた言い方、配慮やモラル・心ない言葉の数々が挙がった。支援マニュアルなどで医療モデルでの画一的支援は母親へマイナスの影響を与えるため望ましくないことが注意喚起されてきた。しかし、今回これらの言葉を発した看護職にはベテランの方も含まれており、現在も医療モデルで母親へ関わり、容赦のない言葉を母親へ発している看護職の存在が明らかとなった。母親はこれらの言葉について“何気ないけど一瞬で突き刺さる言葉”“ちょっとした言葉でもグサッって残ってずっと後に残っていく”【言葉の刃】であり、“どんなに後からフォローを受けても傷つくことを言われた時の【ショックは消えない】”ことを述べていた。“何か言われると、やっぱり(子どもと)接している

時間が長い分、やっぱり責められている気持ちになる。心配な時に拍車をかけられたような”と【自分を責め不安が募る】悪循環に陥っていた。辛辣な言葉や態度が“本当に怖くて”“子どもを産まなければよかったと思った時期も正直ある”と涙ながらに語った母親もいた。それでも“その時は私にとっていいことを言ってくれているとばかり思っていたから”“疑問に思ってもハイとしか言えなかった”“健診は毎回テストの答え合わせに行くようなものだった”と述べていた。ある母親は、“ミルクを足せ、寝たら起こして吐くまで飲ませてと言われて。ほんとに自分でできるんかなって。退院後1週間ノイローゼみたいになりながら指導された通りに一生懸命飲ませたら、今度は肥えたと大騒ぎされて”と、看護職の対応に不安を持ち、子どもに自責の念を感じていた。これらの看護職の関わりは、母親にとって自分の子育てを評価され、まさに指導されているように感じられたのだろう。そのため看護職が言うことは正しく、うまくいかないのは自分のせいだと考えてしまいやすいのではないかと思われる。

また、母親は看護職の【一方的な指導に困惑】していた。“自分が言いたいこと終わったら、はいもう終わり、帰っていいわみたいな感じ”“ストレスフルな時にやっと誰かとしゃべれると思ったらそんな感じで。2時間早く帰らんかなとずっと思ってたけど、もう帰ってくださいとは言えないし。次は予防接種の話で”“私がなんとかしましょう。私がこれでいいって言うてるんだからとか、あなたのためになる、こうすればいいと思う、とか、ほんといらん世話”と看護職の一方的な話に母親は辟易していた。反対に、母親は“あまり気にしなかつたらいいのって言われた。気になっているから来ているのに”“大丈夫って言われたけど、なにがどう大丈夫なのかよく分からないからもっと不安になる”“一般的なことは知ってる。具体的なアドバイスがほしい”と【物足りない指導】にも困惑していた。さらに、“一人にされて怖かった。母子別室つらかった。どうして教えてくれなかったのか”“受診時、(放つたらかちにされて)不安でたまらなかった”と、【何も言われないことによる困惑】を訴えていた。そのため“他の人に看護職が話すことも聞いてしまう”“授乳室で他のお母さんの母乳が順調って言われているのが聞こえて、私はまだダメなんだと勝手に落ち込む”など【看護職が他の人に言った言葉で不安になる】こともあった。

その後、母親は【相手の看護職に自分の傷ついた思いは言えない】まま“ママ友ができるまでずっと一人で耐えていた”り、傷ついた体験を“友達に聞いてもらった”などで解消しようとしていた。友達に話すことで“友達ってすごいって分かった。新たな相談経路が分かった”という【傷ついた経験が新たなサポートを見つけるきっかけ】となった母親

もいた。一方で“友達に話したけど、未だに乗り越えられていない。気持ちの整理をどうやってしたのか分からない。日々の生活に追われているから”“優しさよりきつくガンと言われた時の話の方が何年経っても残るから”“思い出してフンと思ったり。自分自身の後悔。これだけ豊かな情報の中で自分のミスだった”と未だに傷が消えていない母親もいた。

一方、看護職の関わりが適切ではなかったことにより“わが子の成長は私にしか分からない”と母親としての自覚を高め、“最初は真に受けるが、専門家との付き合い方が分かった”“きついことを言われても、そういう先生だからと受け止める”“鵜のみにせず客観的にみていく自分がでてきた”“聞いてしまったものは聞かなかったことにはできないから半分だけきく”“いいとこどり”“残り半分はもっと他の人の話を聞いたりして決める”“話を聞いて自分で決める”など色々なサポートを見つけ、【専門家とのつきあい方を学ぶ】【自分で決めるようになる】という影響もあった。母親が試行錯誤しながら結果的に自立へ向かえることは子育て支援として望ましい。しかし、きっかけが看護職との関わりによる傷つきや困惑であることは果たしてどうなのだろうか。本研究でマイナスの影響を受けた母親達は、後に全員別の看護職にプラスの影響となる関わりを受けることができた。しかし、それがなければ、看護職に対する信頼は大きく揺らいでいたと考える。看護職が専門的知識を持っていても母親に効果的に伝える術を持たず、言葉の刃を発すれば容易に母親の心に深く突き刺さり傷を追わせる。さらに、何年経っても癒えないような深い傷を母親の心に負わせているにも関わらず、母親は“看護職は何も気がついていないと思う”と述べていた。母親にそのような思いを抱かせることは看護職へのさらなる不信感にもなると危惧する。看護職は自らの何気ない言葉の重さを改めて認識し、看護職として母親へ与えている影響がどのようなものかを常に感じとり省察しながら関わり続けることが求められている。

(4) 看護職が関わる子育て支援の場の状況
産婦人科や新生児訪問・乳幼児健診・母乳外来などでの支援については厳しい意見ととても良い支援をしていたという意見と両方があった。しかし、小児科外来や救急外来の看護師に対する厳しい意見が多く、看護師による子育て支援はあまり母親に実感されていないことが示唆された。母親は看護師の動きを見たり私語を聞いたりして、そもそも看護師と関わる時間が少ない、忙しそうで声をかけにくい、冷たい印象、言葉がなげやり、子どもとの関わり方を知らない(あやさない)、説明してくれないので何も分からない、母親の話を書かない、決めつけられる、「泣かせないで下さい」と言われプレッシャーになる、「何でこんなになるまで放っ

ておいたの？」「これ位で来たの？」と言われて辛い、「母乳が足りてない」は母親としてダメと言われたようで傷つく、等を感じていた。小児科に対して「ありがたい。心がやすらぐ。心強い」という発言もあったが、「小児科の看護師にもうちょっと聞く姿勢がほしい。」“忙しいから流れ作業。聞いてもめんどくさそうに答える”“予防接種の時に熱が38度あって。うちで測ってきてもいいんですよってすごい嫌そうな顔して言われた。もう少し言い方あるやろと思う”“忙しいのありありで。聞きたいことあってもきけない”“不安で受診しているのにほったらかされて、病院にいるのに不安がどんどん募る”など不安が解消せず、不満は溜まることを述べていた。外来は地域と医療をつなぐ身近な子育て支援の場である。外来の看護職が母親にとって身近な子育て支援者であることを改めて認識し、関わりを省察する必要がある。

研究：熟練した看護職への調査

保健師は期間内に調査できなかったため、看護師・助産師の他、地域で熟練した子育て支援を行う栄養士・保育士にも調査を実施した。子育て支援歴は4年～39年であった。結果、熟練した看護職や子育て支援者は、子育て支援者コンピテンシーを持ち実践していた。ちょっとした接点を利用して何気ない会話で声をかける（短時間でも意図的に関わりをもつ）、思い込みで話さない、母親の話をよく聞く、共感するなど【母親と対等な立場】で【安心できる関係をつくる】ことを行い、母親の【頑張りをちゃんと認める】ことを心がけていた。母親がどうしたいのかを聞き取り、【母親のしたい子育てを尊重】したアドバイスをしていた。熟練した支援者は、子育て中の母親の置かれた状況・身体面や心理面の状態を理解し、自分が心地よい人にならなければ、自分の言うことを母親に聞いてもらえないことをよく理解していた。そのため、決して専門家としての自分の意見を押しついたり、母親が責められた、否定された、怒られたと感じるような言い方にならないよう慎重に言葉を選んでいった。安心や理解を与えられるよう母親の個性・性格に合わせてどこまでどのように説明するか方法や内容を変えながら説明していた。表出された疑問や不安に対しては、専門的知識を母親の分かる言葉に置き換え丁寧にわかりやすく説明していた。

専門家としてジレンマを感じても指摘せず、なぜそうしているのか【母親へ具体的に聞】いていた。意見を添えたい時には、母親の希望に沿い、専門家として子どもにとって最も良い【いくつかの案を提案】していた。それをするとどのように良いことがあるのか、根拠を母親に説明し、その場合も決して「してください」と押しつけることなく「したらいいよ」「こんな方法もあるよ」と提案し、あくまで選び取るのは母親自身であると

【保護者を信頼する】ことを心がけていた。専門家間で指導内容が異なる場合も母親の困惑や戸惑いをまず受け止め、母親のしたい子育てを尊重する関わりを行っていた。一方的な指導でなく、思いや希望を受け止め、その場で「どうしたらいいだろうね」とできることを一緒に考えたり、その場で一緒にやってみることも行っていた。また、今後起こりうる変化や予測について悪いことも良いことも含めて【専門家として見通しをつけ】て予め説明することで、母親がその時に生じるであろう不安や悩みに準備して対処できるようなサポートを行っていた。

看護職などの子育て支援者は、専門家として母親を安心させる絶対的知識を持っており、主役は母親であることを理解して子どもの健やかな成長発達にとって良いことを一緒に考えながら母親を見守り、そっと助言する姿勢を持っていた。また、母親を認め・労うなど母親の心を癒すことで母親が自信を取り戻し、やる気を持てるような関わり方を行っていた。これらは母親がプラスの影響を受けた時の母親の関わりそのものである。しかし、母親の語りから看護職によるマイナスの影響など全体を顧みると、看護職の子育て支援力はまだ発展途上であると言える。専門職はそれぞれの分野に特化した子育て支援者コンピテンシーを獲得し、子育て支援者としての質を高める努力が必要である。今回の研究では詳細な項目や重み付けの検討までは至らなかったが、作成した要素案について研究協力者を増やしてさらに検討し、看護職が自己研鑽に活用できるコンピテンシーとなるよう今後研究を継続予定である。

引用文献

・吉川未桜、子育て支援センターにおける看護ケア提供モデルに関する研究、平成19～22年度文部科学省科学技術研究費研究成果報告書、2011a

・吉川未桜、看護職による子育て支援に関する研究 - 子どもの健康管理に対する保護者の認識と学習ニーズに関する調査 -、平成23年度福岡県立大学研究奨励交付金報告書、2011b

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉川 未桜 (Yoshikawa, Mio)

福岡県立大学・看護学部・助教

研究者番号：40341523